

インドネシアの生活と活動報告

吉嶋哲也

(19-1、インドネシア、体育、福岡県立香椎高等学校)

みなさん、こんにちは。インドネシアにバレーボールの指導者として派遣された吉嶋哲也と申します。現在は福岡県立香椎高校で保健体育科の教員。バレー部の顧問をやっております。1年前の今頃は、インドネシアで生活していたのですが、特に正月ということで日本のような盛り上がりもなく、雨期で道路が冠水して家の前が川のようになり、バレーの練習に行けない、家の中はカビが生えて困っていたなあと思い出します。インドネシアでの生活は、活動も日常生活も今思うとハプニングの連続だったような気がします。それでは、活動報告をさせていただきます。まずは、任国のインドネシアの紹介をします。

インドネシアは、気候は雨季と乾季しかなく、いつも真夏です。地図で見てもらうとわかるように、多くの島々で構成されているため、島や地域によって民族、言語、文化、習慣、宗教が全く違っている多種多様な状態です。これを、1つに繋いでいるものが、公用語のインドネシア語です。

配属先は、中都市のバレーチームでした。政府が全国22ヶ所に、ジュニア層のスポーツ強化を目的とした施設・組織を設置しています。中1～高2の選手が寮生活を送りながら練習をするといった形態です。とても素晴らしいシステムのように聞こえますが、実情は機能していない部分が多くあり、これが国を挙げてやっている選手強化なのかと疑問に思うことばかりでした。だから協力隊員が派遣されたんだと思います。

練習環境について話をさせていただきますが、覚悟はしていましたがとにかく厳しい状況でした

もう組織されて何年も経つのですが、こんな感じです。とても練習できる状況ではありませんでした。実は、選手や指導者にコートを整備するという意識、習慣が全くないのです。自分たちはバレーをするだけで、コート整備は事務所の仕事。事務所は、ボールさえあれば練習できるだろうといった感じでした。これでは、選手がけがをしようと思い、選手・コーチにコート整備の重要性を話しましたが、なかなか理解してもらえませんでした。

それなら自分でやるかと思って、カマ1本で手作業でやりました。やってみるとこれが大変で、鎌はすぐに壊れる。日陰はない。汗は大量に噴き出て泥まみれ、といった感じでした。いったん始めたので意地でもやめられないと思っていましたが、おかげで、体重は8kg位ダイエットさせてもらいました。一生分の草抜きをしたと思います。スライドの写真は整備前のコート、日頃の練習風景、試合の写真です。

ある朝、「YOSHI！もう草抜きやらなくてもいいよ！」と配属先から話がありました。「よ

かった、ちょっとは私の行動が通じたんだ」と思っていました。こんな感じで、目が点になってしまいました。目をつけるポイントが違うんです。実はその週末、スポーツ省の視察が入っていたからでした。結局。選手のための整備になっていないのです。

コートは、水をまかないと足が滑って仕方ありません。選手が遠くから小さいバケツに水を汲んできて撒く、乾いたら、また同じように遠くから水を運んできて撒く。とにかく効率が悪いのです。日本人のように、時間を大切に効率よく練習する習慣が、やはりないのです。

ふとコート横を見ると井戸が草に覆われていました。「これを何とか使おうよ！」と粘り強く説得しました。しかし、なんとポンプが盗難されました。その後、手で汲み上げる井戸に改修したのですが、次は水を汲み上げるロープや滑車が無くなりました。とにかく、いろんな物が無くなります。最初、選手やスタッフはコート整備をなんでやらないんだ！と腹を立てることがありましたが、彼らには、彼らの言い分があり、お祈りの時間や食事の時間確保が原因だと、だんだんわかっていきました。そして、徐々にコート整備の定例化を定着させていきました。それが、スライドの写真です。

スライドの写真を見てもらえればわかると思いますが、土地だけは広いので、ボールがどこまでも転がっていき、効率よく練習できません。また、たまにどこからかやってきたヤギが暴走するので、危なくて練習に集中できません。配属先に現状を話すと、こんな感じで、またいつになるかわからないし、コンクリートの壁作る資金があるなら、もっと選手のために使おうよといった感じでした。

コンクリートの壁はいつになるかわからないし、もたもたしていると、雨季がやってきます！それなら、防御柵を自分で作ってしまえ！と思い、近所に竹屋さんを発見し、竹を運んでもらいました。そうすると、スタッフや選手もおもしろがって手伝ってくれました。

これは竹を使っのレシーブの練習です。何でも利用しました。後ろの方にさっき写真できれいになっていたはずの観客席が写っていますが、もう木とか草とか生えているのがわかると思います。雨季は、あっ！という間にこんなに生えてしまいます。

街のスポーツ店や首都にはボールや用具は売っていますが、配属先が選手の用具にお金を使いたがらないのです。予算の立て方が無茶苦茶なので、いろいろな所で使われ、肝心の選手の所には資金が届かないのです。日本では、ボールは大切な物ですが、ここでは、質が悪くても、あるからいいだろうといった感じです。

トレーニング用の重たいボールを作りました。中身は古着の靴下、シャツです。おかげで指に一生分の豆が出来ました。

最初はボールカゴもありませんでした。効率的な練習を考えたときにボールかごは必要ですが、そういった発想がないのです。写真のボールカゴは、実は元は鳥かごです。鳥かごとしては、地面にかぶせて使うのですが、ひっくり返せばボールカゴになると思いました。早速、カゴ屋を聞き出し、このカゴを頭からかぶって自転車に乗って、練習に行きました。選手やコーチは大笑いしながらも喜んでくれました。

今思うと、効率的な練習を知らない、考えない。ということもありますが、暑い気候、お金がない状態等置かれている環境がそうさせて、あきらめているところもあるように思いました。それと、実は選手もコーチもコート、用具の状況には困っていました。インドネシアでは、上下関係が厳しいので、インドネシア人コーチが配属先の上司に意見を言うことが出来なかったのです。なので、私が言うしかありませんでした。しかし、配属先は口約束だけで、いつまでたっても状況は変わりませんでした。

スライドの写真を見て皆さんは何を感じますか？選手は立派な揃いの服を着ていると思いませんか？左側の男性が、首都のスポーツ省から、お役人が視察に来たのですが、そんな時だけは、配属先が新品のジャージを配布するのです。特別な日ではなく、日頃が大切と言いたいのですが、それが通用するのは、日本人だけかもしれません。スライドの写真ですが選手は、雨季はびしょぬれになりながら練習。乾季はコート整備をしながら練習。そして、日本から送ってもらった道具を、選手は拭いて大切に使っています。スライドの写真は、私の家でおにぎりパーティーをしています。なんと、寮で選手の食事が停止されたのです。これも、予算が旨く廻らない結果でした。それが当たり前の社会なのです。そのため、選手は道になっているパパイヤを取って食べたりしていました。選手は、みるみる痩せていきます。これでは、立派なシャツを支給されても、強くなりません。そんなお金があるなら、選手の食事、ボール、体育館使用料にお金を使って欲しいと感じました。一生懸命にやっている選手を見ると、涙が出るくらいに強く感じました。

体育の授業を視察に行ったのですが、裸足でも平気な顔です。先生が横断歩道がない道路を、普通に渡って連れて行きます。たぶん、日本では考えられないと思います。スライド③の写真は、工事の中でのテスト風景です。これで、何のテストが出来るんだろうと不思議に思いました。日本では考えられないですね。①～③の学校と、④の学校は違う学校ですが、比較してどうでしょうか？体操服が綺麗で揃っていますよね。靴を履いている割合も違いますよね？貧富の差、格差が学校現場にも当然あるのです。

開発途上国でありながら、小学校の就学率はかなりいいように見えますが、実際は月謝の200円が払えなかったり、家庭の状況、怠けでかなりの子供達が学校に行かなくなります。そして、行かなくなった子供達は、釣りをしたり、道路で物乞いをしたりしています。

その他に、いろんな事をやっておりました。スライド③の写真は、日本で勤務していた学校から用具を送ってもらいました。用具を私が準備して本当に現地のためになるのか、でも、準備しないと日にちばかりすぎてしまい、練習が出来ないと本当に悩みました。それで、結局送ってもらったのですが、かなり古い中古の用具が送られてきました。日本人にしてみたら、「物がないなら中古品でもかまわないだろう」、インドネシア人にとってみると、「そんな中古品は要らない。」といった感じでプライドが傷つけられてしまいます。協力隊に参加する前なら、そんなに用具が不足しているなら、中古品でも捨てる物でも、困っているならあげよう。と考えたかもしれません。何ら悪気はないのですが、現地の人々

の置かれている状況、支援内容、緊急度によっては、こちらの親切が誤解を受けることもあると思います。この時、インドネシア人のスタッフに、「ごめんね、中古品が届いてしまったんだけど」というと、「いいよ、気にすんなよ！おまえの言いたいことはわかってる。ありがとう」と言ってくれました。彼らの懐の大きさを感じました。

それでは、次はインドネシアの紹介ムービーです。

最後に、インドネシア人から見た日本人に対してのイメージは、ここにあげているようなことです。この内容というのは、日頃のしつけとして、家庭や学校で言われていること、言われてきた事だと思います。これは日本の今までのしつけが間違っていない、自信を持っていいことだと思いますし、こういった点が、外国からは評価されていることを、日本人として忘れてはいけないと思いました。そして、このようなマイナスなイメージを持たれているのですが、スライドは教員をさせてもらっている私にとって、学校現場や生徒と接する上で気をつけておかなければならないことだと感じました。

又、今まで学校の現場では、不登校や退学する多くの生徒達、社会規範が低下していく子供達と接する中で、この先の日本はどうなるんだと感じていました。しかし、赴任前の研修所では、バイタリティーあふれる多くの若者と出会い、日本の若者もこんなにすごい人たちがいるもんだと感心しました。そして、嬉しいことなのですが、教え子が既に私の先輩隊員として派遣され、また、1人は同じ隊次で派遣。実はその子は、研修所が別であったため、県庁の表敬訪問でバッタリあって発覚しました。1人は、帰国後、別の帰国報告会があり、その時に発表者として出席したのですが、隣の席の発表者が教え子だったということもありました。現役の高校生の頃とは、間違えて成長しており、私としては、嬉しいと同時に、少し恥ずかしいといった感じでした。志を持って生きている彼らに、とにかく、感動しました。

異文化、異国、異なる社会で生活する上で大切なことは、自分から理解しようとする心や姿勢を持つことだと思います。結局、目の前で起きていることは、全てを知らないかわからないと言うことです。そのためには、……………こんな感じです。しかし、謙虚な姿勢とともに、時にはきっぱりと自己主張を行うことは、必ず必要だと感じました。そして、ふとした時に現地で思ったのですが。このことを「学校・生徒」に置き換えてみると、教員生活、学校現場、生徒と接する上で、必要な姿勢という点、気づかされた部分がありました。

本当にいろんな事が起き、いっぱい笑い、怒り、泣き、戸惑った2年間でした。実はまだ頭の中がうまく整理できていません。日本は、便利で、水も、食事も何でもある。高度な医療。高度な制度がある。その反面、日本が無くしてしまい、インドネシアから学んだことも、本当に多くあります。例えば、家族の繋がりやの強さ。人との距離の近さ。助け合いの心などです。そして、自然災害、医療技術の低さ、日本ではありえない事でよく人が亡くなります。その事が当たり前の社会であり、インドネシア人はそれを受け入れています。とにかく、「命」について考えさせられました。そして、Tidak apa2 とありますが、

失敗しても、何がおきても、彼らは「大丈夫」、「問題ない」と笑顔で言います。失敗やミスを許す寛容さ。と、そう言ってないとやっていけない現実といったところでしょうか。「幸せの意味」と書きましたが、お金がなくても、物が無くても、家が狭くても、みんな笑って生きていました。家族が本当に仲がよく、どこに行くにもバイクで4人乗りといった感じでした。今の日本は、物質的な豊かさ、技術の進歩、便利な世の中になっています。その分、忙しく、何か余裕が無く、心の豊かさ、人の温かみといった人間本来持っているもの、持つべきものに社会が光を当てていないというように感じます。インドネシアの方々と共に生活し、今までの幸せの価値観を変えられました。その感じた部分を、これから出会っていく生徒達、周りの人達に伝えていきたいと思っています。

ご静聴ありがとうございました。







